

鷺山^{せみ}蝉遺跡より出土した将棋の駒についての報道機関発表資料

平成16年3月2日 午前11時30分から
於 市政記者室

1. 出土した将棋の駒について
2. 各地の事例
3. 意義

〔参考：将棋の歴史について〕

< 問い合わせ先 >

(財) 岐阜市教育文化振興事業団 埋蔵文化財調査事務所

岐阜市教育委員会 社会教育室 文化財グループ

1. 出土した将棋の駒について

本発掘調査は岐阜市鷺山第二土地区画整理事業に伴うもので平成15年度より開始した。今年度の調査面積は1,322㎡、将棋の駒が出土した鷺山蝉遺跡A1区の調査面積は147㎡で、調査は平成15年12月18日から始まり、平成16年3月5日までの予定である。

将棋の駒は調査区の北西コーナー部分で見つかった戦国時代の屋敷の周囲を区画する溝内（出入り口付近）から出土した。溝の幅と長さは不明であるが、深さは約1.5mを測る。駒は検出した面から深さ約1.2mの所から出土し、溝からは他に土師器皿、漆器の皿、箸、貝、獣骨などが出土している。それぞれの遺物から見て、年代は16世紀前葉と考えられる。

出土した駒は「王将」1点のみで、大きさは長さ3cm、上部幅1.8cm、下端部幅2.3cm、厚さ4-5mmを測る。木製で樹種については今後分析する予定である。また、文字は墨で書かれている。

2. 各地の事例

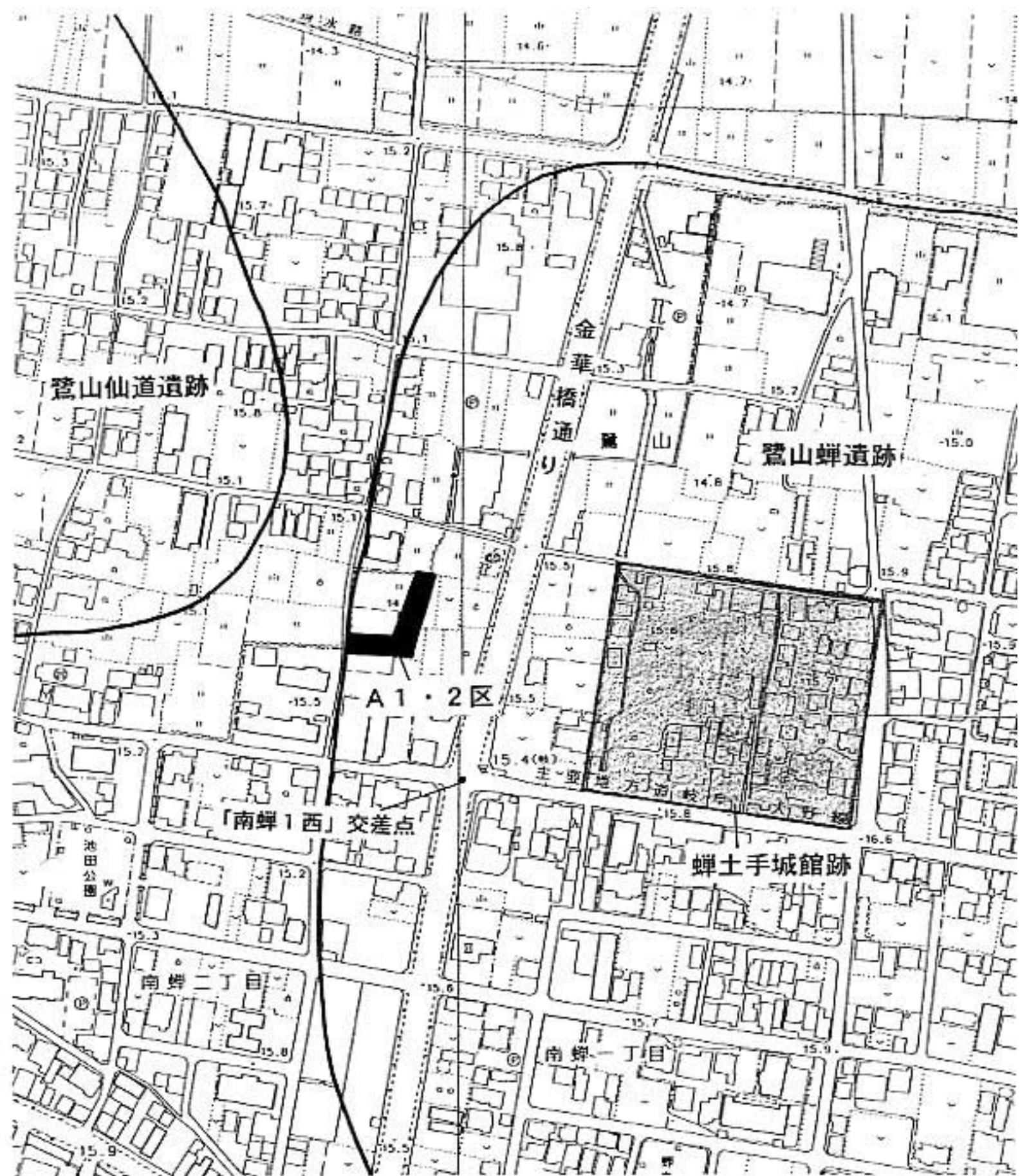
将棋の駒の出土例は全国的に見て多く、105ヶ所を越える遺跡で計500個近い例がある。東海地方において、愛知県では清洲城下町遺跡、名古屋城三の丸遺跡、三重県では二見町安養寺跡、赤堀城跡、静岡県では小川城跡、駿府城三の丸跡から出土している。岐阜県内では今回の出土例が初めてで、また「王将」に限ると、静岡県の駿府城三の丸跡で出土した「玉将」について東海地方で2例目（戦国時代では初）である。また、材質としては木が圧倒的に多く、他には石や焼物（瀬戸焼、伊万里焼）などがある。

3. 意義

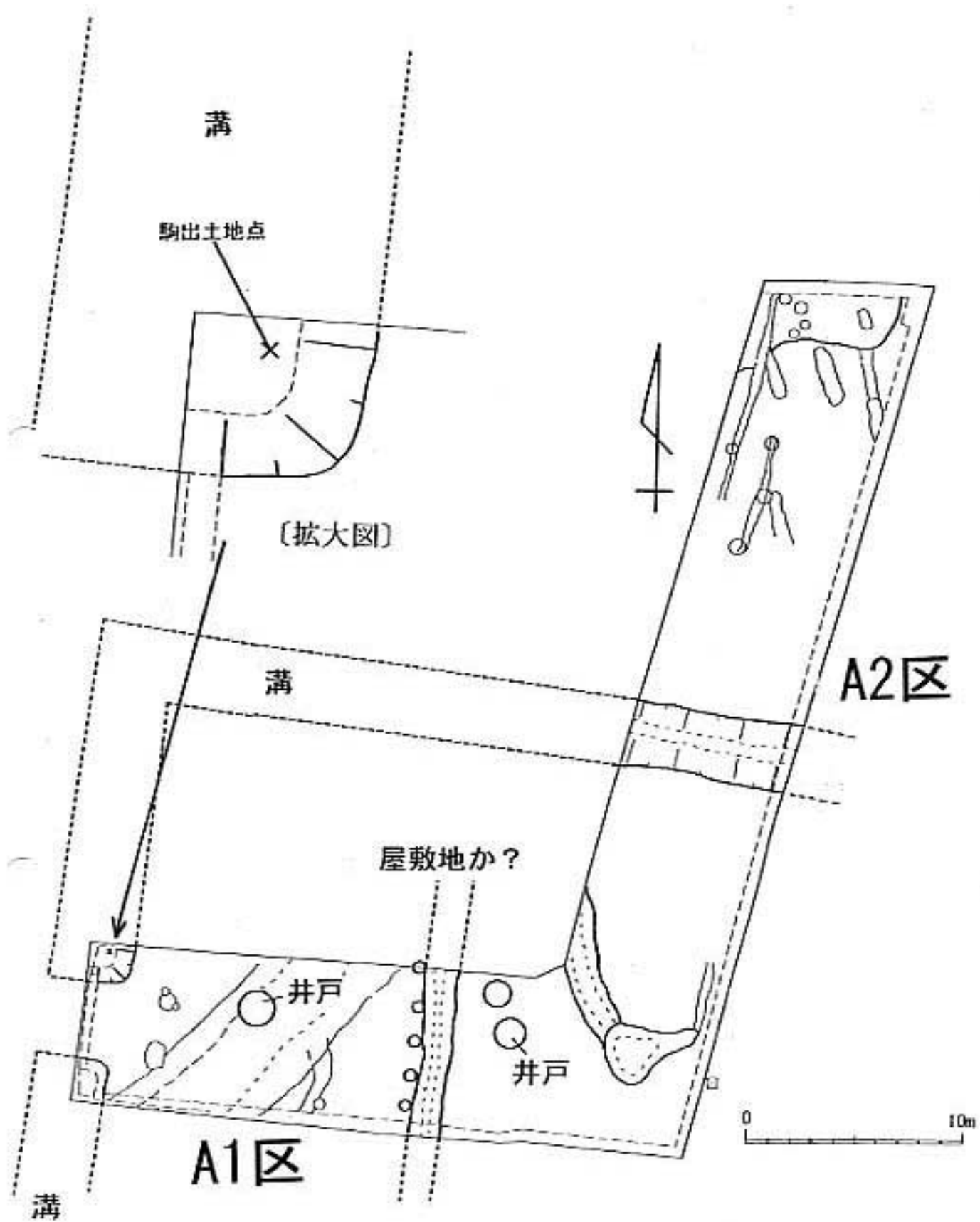
今回出土した将棋の駒が使用されていたと考えられる16世紀前葉は、日本各地で将棋が指されていたが、指し手のほとんどは貴族や僧侶、上級武士や富裕な町人たちであった。このころ鷺山遺跡群には美濃国の守護土岐氏の居館である福光城があったとされ（位置は未確定）、その周囲には城下町が形成されていたと考えられる。鷺山蝉遺跡が含まれる鷺山遺跡群の発掘調査では、城下町の痕跡が多く見つかっている。鷺山蝉遺跡での成果として、「蝉土手城館跡」に伴う堀跡の発見は、土岐氏の重臣などの館跡の可能性を示唆するものとして大きな話題となった。将棋の駒は蝉土手城館跡の西約150mの地点で出土し、城下町の中でもより中心に近い場所であることから、上記したような身分の高い人に使用されていたものかもしれない。

〔参考：将棋の歴史について〕

将棋が中国から日本にもたらされた時期は明確ではないが、遺跡から出土した例で最も古いものは、奈良県興福寺旧境内の井戸跡から出土したもので、同じ層から出土した木簡に「天喜六年」（1058年）の紀年銘があることから同時期と考えられている。このことから11世紀には将棋が日本にあったことがわかる。その他の出土した事例を見てみると、平安時代から室町時代までは寺院跡、神社跡、役所跡、屋敷跡、城跡や城下町跡などからの出土例が多い。将棋を好んだ人々は、貴族や僧侶、上級武士や富裕な町人たちだったと考えられる。江戸時代以降、幕府公認の盤上遊技として保護されたこともあり、将棋は一般庶民にまで溶け込んでいった。



鷺山蟬遺跡 A 1・2 区位置図



鷺山蝉遺跡 A 1・2 区平面図